女性の日記から学ぶ会「25周年のつどい」

埋もれた戦史伝える「タリナイ」上映

八千代市を拠点に活動する女性の日記から学ぶ会の「25周年のつどい」が7月10日に八千代市東南公共センターで開かれ、会員など45人が出席。窓を開け、席を離した会場で再開を喜び合い、若き映画監督・大川史織さん制作の南洋に埋もれた戦史を伝える映画を鑑賞してトークに聴き入った。

会では庶民の日記を読み解く作業を地道に続け、すでにスペイン風邪や関東大震災、戦争と動乱に満ちた大正から昭和にかけてを生きた吉田得子さんの一代記を2巻組で刊行している。

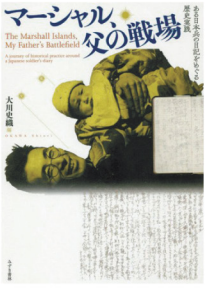
つどいでは初めに島利栄子代表があいさつに立ち、吉田得子日記にはスペイン風邪で葬儀が続く様子が記されているが終息の記述がないことを紹介。「コロナ禍もいつの間にか収まると思いますが、得子の日記に人間はたくましく災いを乗り越えていけることを教わります。庶民の日記から100年後の人々が学べるのです」と語り、先月発見された作家・田辺聖子さんの日記に触れ「街頭でドイツの降伏について語る新聞記者を〈ちまちまする〉と評したり空襲で焼け出された父親が亡くなる様子も記すなど見るものは見て、書くものは書いています。皆さんもコロナ禍をどう感じてどう暮らしているのか、1日1行でも自分の言葉で綴って」と呼び掛けた。

島利栄子代表

田中祐介幹事

大川史織監督

映画「タリナイ」から　© 春眠社



大川監督の著作＝右から「マーシャル、父の戦場」「なぜ戦争をえがくのか」の表紙

続いて大川監督が紹介され、太平洋戦争末期の激戦地マーシャル諸島で戦没した佐藤冨五郎さんの日記を手がかりに、74歳の息子・勉さんが父の最期の地を訪ねるドキュメンタリー「タリナイ」（2018年）を上映。明るいウクレレの音色をBGMにヤシの木が覆う白い砂浜と錆びた砲台、「お父さん！勉です！」と父を呼びながら島々を巡る勉さんの姿、日本人の知らない日本語の歌を笑顔で歌い、日本軍が残した電線で髪飾りを作る現地の人々が描かれ、虚飾のない映像に会場が引き込まれていた。

上映後、同会幹事で明治学院大学専任講師の田中祐介さんとのトークで大川監督は、環境問題を学ぼうと18歳の時に参加したスタディーツアーで初めてマーシャルの日本統治時代を知った衝撃と戦争の記憶が失われる危機感から大学卒業後に現地で3年間働きながら映像を撮り溜めてきたことや、大使館員に冨五郎さんの日記について聞き、日記を保管している勉さんとの交流が始まったことなどを語った。

大川監督は映画と著書「マーシャル、父の戦場―ある日本兵の日記をめぐる歴史実践」（みずき書林）で第6回山本美香記念国際ジャーナリスト賞・奨励賞を受賞。今年2月には「なぜ戦争をえがくのか―戦争を知らない表現者たちの歴史実践」（同）を出版している。